

かきを知られよ。(中略) 神の心で神を祈らば我が心に神宿る。「おのれの愚かさを自覚する」、あるいは、「神の心で神を祈れば我が心に神が宿る」といった事柄はすべて、「解脱」という究極の真理に向けて行われる「行」である。「解脱」することの具体的なあり様を、晩年の聖憲は説き続けたといつてよい。

昭和二十三年(一九四八)六月には東京道場が再建され、六日に落慶式が執り行われた。この日の聖憲は「修験道」に触れる口演を行っている。いつも大祭には宗教学人は常に反省すべしと申しますが、其の理由は、今日の神祭り、それは優婆塞で、其の身其の儘、これが修験道の本質で、それは皆さんが改めて修験道を知って頂きたいことで、世間の人は解脱は神様か仏様かと尋ねられるが、私から言えば神

も仏もと言わねばなりません。それは神前に現れておる。天地神祇、大日如来、これは神、これは仏と言っておる事は宗教人の認識不足と私は言うて居ります。よく今日限り会員は修験道の本質をしっかり覚えて、形式にとらわれず修験実証でなければなりません。

先に「解脱」ということの意味について説いた聖憲の言葉に触れたが、ここではそれを支える「修験道」のあり方、また「修験実証」のあり方を説いている。人間は「色分け」によって自己(神も含める)の関係を形成するが、その「色分け」は修験道の本質ではなく、むしろ「色分け」する以前のあるがままを受け入れ、行住坐臥に「行」を実践していくことが「修験道」であると説くのである。

聖憲の最後の願いは

「死した後も泉山を護持し奉らん」とのことであった。御寺泉涌寺は皇室の菩提寺であるから、その地への埋葬にはさまざまな困難が伴う。そうした困難を押し、経蔵を含む一千坪の土地の永代使用が、同年九月に許可された。このことが一つの区切りになったのである。秋の大祭を終えた十一月四日、聖憲は帰らぬ人となった。ちなみに、現在の金剛宝塔が建立されるのは、昭和二十九年(一九五四)、聖憲の七回忌に合わせてのことである。

付記 「岡野聖憲」の記事を連載するにあたって、法主・岡野聖法様、理事長・岡野英夫様をはじめ、解脱会本部役員の皆様には一方ならぬご協力を賜りましたこと、記して御礼申し上げます。また、毎月の原稿チェックや写真の提供にご協力いただきました。また、解脱会出版部の皆様には改めて御礼を申し上げます。

あ 愛別離苦は四苦八苦のひとつ

愛別離苦とは、どんなに愛する人でも必ず別れはやってくるといふ意味である。これは四苦八苦の内の一つ。

その他の四苦八苦は次の通りである。

生 思い通りの環境に生まれてくる事は出来ない。

老 老いることは避けることが出来ない。

病 病の苦しみは避けられない。

死 誰にでも必ず死は訪れる。

怨憎会苦 怒みや憎しみを感じる人と出会う事は思い通りにならない。

求不得苦 求めても得ることが出来ない事は思い通りにならない。

五蘊盛苦 身も心も思い通りにする事は出来ない。

句・菅谷秀文 36

絵・橋本豊治

富士に祈る 71

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その25 —

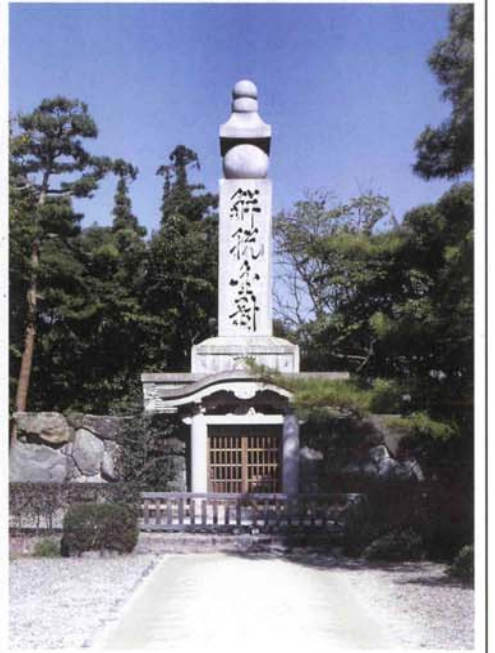
先回は、昭和二十年(一九四五)八月十五日に終戦の日を迎え、焼け野原になった日本を復興させるべく、日々の産業指導にいそしみ、「我なきあと」を囿る聖憲の歩みを記した。今回は、聖憲が最期を迎えるその瞬間まで説いた、解脱の教えについて記す。

敗戦の混乱が続く中、昭和二十一年(一九四七)三月には、宗教学法人令による「宗教学法人解脱報恩感謝会」の設立登記が行われた。「宗教学法人令」は太平洋戦争直後の昭和二十年(一九四五)十月、GHQによって廃止された「宗教団体法」(昭和十四年(一九三九)制定、翌年施行)に変わって制定されたものである。

その四月、三聖地巡拝が行われた。伊勢神宮は終戦の影響のため、昭和二十四年(一九四九)に行われる予定であった。ちなみに、この三聖地巡拝に先立つ講話において聖憲は「真の解脱」を説き、「我なきあと」を次のように示唆している。

真の解脱とは全世界の平和を、人類の幸福を祈り、中道を歩み、右に偏せず左に偏せず中庸を歩めよ。謙譲の美德を備えよ。馬鹿と貧乏の稽古に徹せよ。一にも、二にも、三にも努力せよと言った。皆はまだまだ自己の頭を働かすうちは駄目である。一切お任せに切

つた式年選宮を昭和二十八年(一九五三)に延期せざるを得ない状況であった。権原神宮や御寺泉涌寺も四百人にもおぼる巡拝団をどのような気持ちで迎えたか、察するに余りある。



御寺泉涌寺の金剛宝塔(解脱会提供)

りかえよ。神の心を我が心とせよ。(中略) 皆はそろそろ會長なきあとの準備をせよ。皆も子孫のために無形の財産を作ることに心がけよ。財を残すことは子孫の悩みの種を、また道楽息子の製造機を買おうと同じではないか。心の財こそ、子孫の尊い宝である。

これらの言葉の一つ一つがこれまで聖憲の説いてきた「解脱」や、「神と人」との関係性を端的に表すものであろう。「馬鹿と貧乏の稽古」や「神の心を我が心とせよ」といった言葉は、例えば同年五月の大祭時に行った講話の中で次のように言い換えられている。

我が国民全部解脱せよ。解脱して初めて一切のことが感謝で受けられるもの。感謝なくして一日たりとも送れぬもの。社会人は今や仮面をぬげと。お互いはおのれの馬鹿を振り返ってみよ。今日の愚